

ふるさとの風景を再発見する

代表者 雑草と里山の科学教育研究センター・准教授・西尾 孝佳

協力者 一般財団法人里山大木須を愛する会・代表理事・堀江 一慰

1. 事業の目的・意義

高齢化・過疎化が進む里山では農地や森林の荒廃が著しく、住民の心の拠り所であるふるさとの風景が著しく変化した。本事業では、ふるさとの風景とは何か、それはどこに残るのか、何が悪くするのか、どうすれば本来の景色を取り戻せるのかについて住民と考える。



図2. 地域で確認できる特徴的な花ーヤブデマリ

2. 事業内容

(1) 花咲く風景の観察

昨年度の事業で、雑草やツル植物が増加するなど地域の風景が変化した状況を住民と確認した際に、住民から、「最近では緑ばかりで花が少ない」という声があった。そこで本年度の事業は、ふるさとの花咲く風景について考えることとし、その糸口として蜜源植物に注目した。那須烏山市大木須地区では、地域資源の一つとしてニホンミツバチの飼育を行っており、住民にとって、風景の構成要素として蜜源植物は重要である。2017年5月、住民とニホンミツバチの飼育に関心のある住民以外の訪問者とともに、地域内の山地、農地、耕作放棄地、水路などを散策しながら、そこに分布する蜜源植物の状況を観察し、ふるさとの風景における花の役割について参加者と意見を交わした。



図3. 地域で確認できる特徴的な花ーキブシ

春先に谷沿いで黄色い花を咲かせる。しかし、多くの個体はクズなどのツル植物に巻きつかれて成長が阻害されたり、変形したりしている。



図1. 地域で確認できる特徴的な花ーウワミズガラ

観察の中で、多くの蜜源植物、印象的な花を咲かせる在来植物(図1-4)は管理停滞によって増加したツル性の植物や常緑性の植物に被圧され、成育が悪かったり、分布が制限されていることを確認し



図4. ハルジオンを訪花するニホンミツバチ

雑草や外来種も重要な蜜源植物。管理停滞によって増加するクズ、フジなどのツル植物も蜜源植物となる。雑草や外来種が増えて風景が変化する一方、ミツバチの活動を支える側面もあることを、参加者と確認した。

た。その後も、蜜源植物の分布および生育状況について、ニホンミツバチの飼育を行う住民と風景のあるべき姿について情報交換した。

(2) 風景素材の収集

住民の多くは高齢者で、慣れ親しんだ自然を散策する機会が限られている。また、若い世代の住民では、ふるさとの風景に対する関心があまり高くない。そこで、各季節に地域内を踏査し、地域を特徴づける風景の記録を行った。特に、かつては農地だったが今は管理放棄され、藪化、森林化した場所、山から見た集落、季節を特徴づける風景、最近生じた風景の変化などの記録を優先して実施した(図5-7)。また、記録する際には、位置情報も取得し、画像データを位置情報と結びつけた学習素材とすることに留



図5. 尾根部から見えた高原山

山仕事をよくやった住民でも高原山がよく見えることは知らなかった。手前に多い濃い緑の樹冠はモミ。斜面には落葉広葉樹二次林がひろがるが、尾根にはまだモミがよく残る。



図6. ほたるの里古民家おおぎすの裏山からみた集落の様子



図7. 晩冬から初春に開花するミツマタ(以下続く)

ミツマタは地域内に群生地があるが、住民でも知る人は少ない。(図7の続き)

意した。情報の収集においては、様々な感性、視点からを記録するため、宇都宮大学の学部1-3年生数名も現地踏査に同行し、風景の撮影を行った。

3. 事業の進捗状況

いわゆる蜜源植物に加え、楮などかつて有用植物として栽培後、管理放棄され、野生化している果樹の分布地を確認し、住民へ情報提供した。観察会という場にとどまらず、出会った住民と、ふるさとの風景の現状、これまでの変遷について対話して、情報共有した。

4. 事業の成果

昨年度実施した風景の現状把握、住民との情報共有を発展させて、本年度は花咲くふるさとの風景について考える機会を提供した。その過程で、①高齢化や過疎化によって里山の管理が停滞するとかつてよく見られた花咲く風景も減っていること、②蜜源となる花の増加は新たな地域資源として住民が注目する蜂蜜の質および量の向上に貢献しうること、③集落の中には活用が期待される風景素材が眠っていることなどが明らかになった。

5. 今後の展望

雑草に覆われ、風景が変化する現状を伝えた昨年度の活動よりも、ふるさとも感じさせる風景素材を探した今年度の活動の方が、住民には明らかに喜ばれた。今後はこの視点を、ふるさとの原風景を取り戻す手法を開発する糸口として活用していきたい。今年度は、地域内全てを踏査できたわけではないので、さらに広く、かつ様々な季節に渡って、ふるさとも感じさせるあるいは資源となりうる風景素材を記録していきたい。現在は、見える様子をアクションカメラで動画で記録する試みなど、記録の幅を広げている。記録した画像や動画は、観察ルートの設定のほか、室内の講座でも、風景内の散策を疑似体験できるような仕掛け作りに活用したい。また、この事業では、現在の風景にとどまらず、昔撮影された画像から、ふるさとの原風景に遡る試みにも挑戦し、住民との情報共有をさらに深めていきたい。